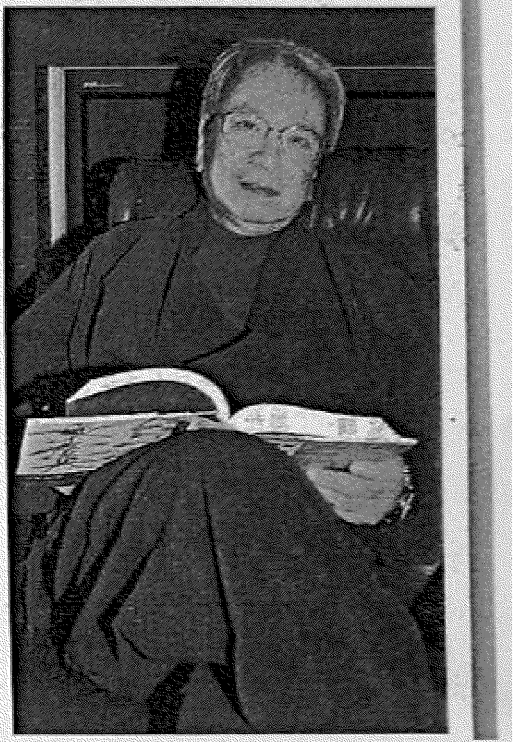
2014/01/18 関東明教会　新宿センタービル

そして今の私

記憶に残るあのとき

奈良芸術短期大学教授　前園　実知雄さん(62)＝東温市

恩師の研究姿勢を胸に



2009年(平成21年)5月6日　水曜日

愛　媛　新　聞

奈良県内を中心に約二百カ所の遺跡発掘調査を経験、愛媛と奈良を毎週行き来して大学での講義や、文化財関係の委員を務めるなど活躍している。前園実知雄さんが考古学の道に進んだきっかけは、森浩一同志社大名誉教授との出会いだった。

「学問はこんなに面白いのか」―。同志社大一回生の一九六八年、森先生の考古学概論の授業に感銘を受けました。卒業後その年の夏休み、考古学実習として奈良県での発掘調査に参加しました。

大学で好きなことをしたら実家（東温市）の寺を継ぐつもりでしたが、先生と出会って進路が変わりました。

大学院受験に失敗した時も、心配した先生が橿原考古学研究所で経験しないかと声をかけてくれました。それしかないですね。講師を経て七二年、正式に職員になりました。

節目節目でお世話になり、相談もしていました。

勝ノ木古墳（奈良県斑鳩町）の発掘調査主任をしていた八八年、石棺内部にファイバースコープを入れる前の晩、一昌先生の声が聞きたくて電話しました。「やるべきことをやったらいい」と言われ、気持ちが落ち着きました。

先生が中退の大学に復帰されたとき、私に講義する機会を与えてくれたこともあります。

「通説にとらわれず、自分の目で確かめ自分の考え方を持て。広い視野で見よ」―先生の研究姿勢を胸にやってきました。

考古学を通じて、自分なりの知識や経験から発掘することを決め、思い描いた通りに遺跡が出たときの感動は大きいです。千年、二千年の時を超え、古代の遺跡や遺物に最初に出合える刺激さも魅力にあります。

先生は吉野ケ里遺跡（佐賀県）の地元でのシンポジウムで「考古学は、地域に勇気を与える」と言われました。会場の熱気がすごく、とっさに思いついた答えです。私もいちばん大事なことだと思います。文献は中央が中心になりがちですが、考古学は実際の遺物で歴史を考えます。モノは正直です。考古学を通して真実の歴史を掘り起こし、地域を元気にしたいと思っています。

住職だった父が亡くなり、九八年に故郷に戻って跡を継ぎ、地域の人に助けてもらっています。振り返ってみれば恩師や同僚、地域の人、いろいろな人のおかげで今やっていられると、ありがたいことだと思います。

（聞き手　生活文化部・渡辺純子）

〈第1水曜日に掲載〉

考古学と私

前園実知雄（昭和40年卒）

1　考古学との出会い
2　橿原考古学研究所へ
3　太安萬侶墓の発掘調査
4　中国への留学
5　藤ノ木古墳の発掘調査
6　最後の発掘調査（唐招提寺）
7　奈良芸術短期大学へ
8　中国　青海路の調査
9　愛媛県埋蔵文化財センターでの仕事
10　今後の展望



前園さんが当時発掘調査していた中国を訪れ石造物をスケッチする森浩一同志社大名誉教授＝1996年

産經新聞　2013年9月16日

葬送

森浩一（もりこういち）氏

考古学者

ホルモンの焼き肉店だったという。熊本県内での森さんの講演会で司会を務めた際のエピソードも披露。会場の外では地元の人たちがバーベキューで迎えてくれるなどお祭り騒ぎだった。「先生はとてもうれしそうでした。考古学は地域を元気にするとおっしゃっていましたが、それを全身に受け止めているようでした」と話した。



「森先生のとびっきりの笑顔が今も忘れられません」。お別れの会で涙を浮かべながら語ったのは、女優の宮崎美子さんだった。台風18号の影響で東京からの新幹線が遅れ、息をきらせて会場に駆けつけた。

森さんとの出会いは25年ほど前、京都での番組収録。駅で待ち合わせをすると、「昼飯を食べに行こうか」と誘われ、連れていかれたのが

「お茶の間考古学」（15日、京都市下京区・京都タワーホテル）

約350人が参列。歴史を親しみやすく説く「お茶の間考古学」の草分けだったが、一般の考古学ファンの人たちも遺影に手を合わせていた。作家の司馬遼太郎氏らと歓談する生前の写真も紹介され、幅広い交流を物語った。

同志社大の教え子だった前園実知雄・奈良芸術短大教授(67)は「司馬さんは『この国のかたち』をエッセーにまとめられたが、森先生も歴史を通して国の進むべき道を示してくれました」。上田正昭・京都大名誉教授(86)も「韓国の古墳に2人で行ったとき、3時間近く石室に入って隅から隅まで見た。いつも森さんの情熱にうたれた」としのんだ。

お別れの会実行委員長を務めた前園さんは自ら僧侶をもつ。「今日は先生が亡くなって40日。(浄土へ旅立つ)四十九日まで間があり、今ごろ会場のどこかで辛口のコメントをされているのでは」とあいさつで述べた。森さんのおらかさを示すように、会場はいつまでも温かい雰囲気に包まれた。8月6日死去、享年85。（小畑三秋）

2011年(平成23年)6月15日　水曜日

真珠、新世紀

神と人つないだ宝石

奈良芸術短期大学教授
前園　実知雄さん(64)

アコヤ真珠が見つかり大きな注目を集めた。同墓の発掘調査を手掛けた考古学者の前園実知雄さん＝東吉野村在住＝に、日本人と真珠の歴史的な関わりについて聞いた。

――古代の日本人にとって、真珠はどんな存在だったのか。

「魏志倭人伝」に、倭国（わこく）で真珠が採れることや魏の皇帝が銅鏡などとともに卑弥呼（ひみこ）に真珠を与えたことが記されている。縄文人や弥生人はヒスイなどの光沢があるきれいな石（真石）を身に着けていた。『古事記』の編さん者・太安万侶（生年不詳～723年）の墓（奈良市）からは有機物のため腐りやすく、真珠と違ってほとんど出土しないので詳しいことは分からない。

――奈良時代になると、出玉、阿古屋珠（あこやだま）、白玉などと呼んで記述がある。真珠は神と人をつなぐものであり、命の代わりに神にささげる特別な存在だった。

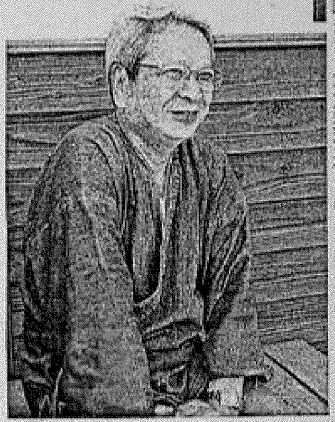
太安万侶の墓には、アコヤ真珠が副葬品として納められていた。

――寺を建立する際の地鎮の道具「鎮壇具（ちんだんぐ）」として使われており、奈良の東大寺や元興寺、興福寺などの基壇から見つかっている。仏教は本来、仏舎利（仏の骨）が最も重要な礼拝対象だった。鎮壇具に真珠を加えたのは、骨と似ている真珠を仏舎利に例えたのかもしれない。

真珠の歴史や文化的な側面にスポットを当て、物語性を持たせて真珠をアピールできそうだ。

――歴史的に見ると、真珠は装身具、特別な霊力を持つ物、仏舎利の代用品としての意味があったと考えられる。日本人にとって真珠はただの宝石ではない。文化の一部だ。

（聞き手・高橋正剛）



まえぞの・みちお　1946年東温市生まれ。専門は考古学。龍谷大学文学部卒業後、奈良県立橿原考古学研究所に入り、藤ノ木古墳など数多くの遺跡の発掘調査を手掛ける。98年から現職。

えひめの海から　特別インタビュー

奈良新聞　2012年1月1日

神代人代

古事記完成1300年

太安万侶 (上)　掘り出された墓誌

それは一片の木炭から始まった。昭和54年1月、奈良市此瀬町の茶畑で植え替え作業をしていた西岡英夫さん(54)は、土中から次々と出てくる木炭に首をひねった。ぽっかり開いた穴に納められていたのは銅板の墓誌。『古事記』の編者として知られる太安万侶の火葬墓だった。国内最古の歴史書とされる『古事記』の完成から今年で1300年。「高松塚以上」と言われた発見を振り返る。

「明日、簡単な道具を持って此瀬へ行ってくれるか」「県立橿原考古学研究所に勤務していた前園実知雄さん(65)＝奈良芸術短期大学教授＝は、調査課長の石部正志さんにそう告げられた。

そのころ、茂林寺で相撲していた調査がちょうど大詰め。前園さんはいったん断り、墓誌発見の事実を知らされることになる。

「石部さんは場所にも分からないようだ」と翌日、前園さんが現地で検証すると、「古墳時代の墓ではない」と判断された。

「ただ、墓誌は出ていないか心配でならなかった」

発見された墓誌は縦約29センチ、横約6センチ。木槨（きかく）の板材に張り付き、「太朝臣安萬侶」の文字がはっきり読めた。木槨は腐り落ち、周囲に詰められた木炭が空洞状に残っていた。

翌日、前園さんが現地に到着すると、墓誌のめった場所だけ、カラスの濡れ羽色ですぐ分かったという。

その日の午後3時から現地で検証。墓誌と遺骨を確認した。

「日本書紀」には、茨城で海人（あま）が命と引き換えに海底の骨灰に交じり、4粒のアワビから真珠を取り出し島の神にまつったとの記述がある。真珠は神と人をつなぐものであり、命の代わりに神にささげる特別な存在だった。

太安万侶の墓には、アコヤ真珠が副葬品として納められていた。

――寺を建立する際の地鎮の道具「鎮壇具（ちんだんぐ）」として使われており、奈良の東大寺や元興寺、興福寺などの基壇から見つかっている。仏教は本来、仏舎利（仏の骨）が最も重要な礼拝対象だった。鎮壇具に真珠を加えたのは、骨と似ている真珠を仏舎利に例えたのかもしれない。

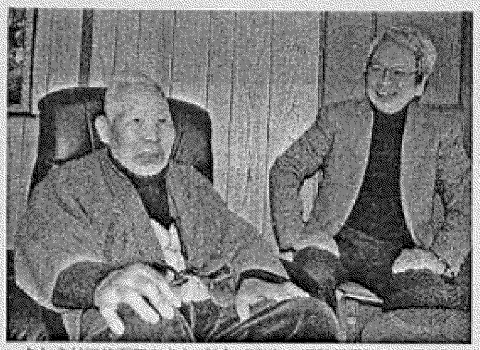
真珠の歴史や文化的な側面にスポットを当て、物語性を持たせて真珠をアピールできそうだ。

――歴史的に見ると、真珠は装身具、特別な霊力を持つ物、仏舎利の代用品としての意味があったと考えられる。日本人にとって真珠はただの宝石ではない。文化の一部だ。

（聞き手・高橋正剛）

まえぞの・みちお　1946年東温市生まれ。専門は考古学。龍谷大学文学部卒業後、奈良県立橿原考古学研究所に入り、藤ノ木古墳など数多くの遺跡の発掘調査を手掛ける。98年から現職。

畑で作業中の大発見



久しぶりに竹西英夫さん（左）を訪ね、墓誌発見について懐かしむ前園実知雄さん＝先月20日、奈良市此瀬町の竹西さん方

発表。1時間後には応をへりコプターが舞い始めた。

見学者が押し寄せる中、前園さんと岡田の関川尚功さんは開いた穴の実測に着手する。

「写真でいいと言われたが、セオリー通りきちんとやりたかった。中に木綿糸を張り、木炭を一つ一つ取っていった」と前園さん。

やがて、指の先ほどの銅板のかけらを発見する。現場にあった墓誌の写真と照合したところ、欠けた部分にぴったり。

竹西さんの記憶では最終は南向きだったが、頭部の位置から北向きだったことが分かった。埋納状況の復元につながる重要な成果だった。



木炭がびっしり詰まった太安万侶墓の出土状況（橿原考古学研究所提供）

第一発見者となった竹西さんは、連絡を受けて駆けつけた県庁の担当者から「これは高松塚以上の発見になりますよ」と言われたのを覚えている。報道されると、「畑の中をはうように人が登ってきた」とほほ笑む。

戦中はシンガポールに出征。銅板が墓誌とは分からなかったが、「兵隊の認識票のようなもの」とピンときたという。周りの茶畑はユンボで植え替えが進められていたが、竹西さんの畑は傾斜がきつく手掘りとなった。

「それが全ての始まり。ユンボを入れてたらひとたまりもない。仕事も手早にするたちで、いろんなことがうまくかみ合った」と竹西さんは振り返る。

現地は今、墳丘の推定範囲が石列で示され、「太安萬侶墓」の石碑が立つ。傍らには桜の大木。発掘の季節は見事という。「墓誌の発見後に植えられたとは聞えないね」と前園さんは目を細めた。

＝つづく＝

メモ

太安万侶墓　木炭槨（かく）と呼ばれる構造で、方形に掘り込んだ穴の底に炭を敷き、その上に墓誌を乗せて納棺した木槨を安置。周囲を木炭で覆ってさらに土で埋める。墳丘は削られていたが、直径約4・5㍍の円墳と推定されている。

毎日新聞　2003年12月12日

被葬者は悲劇の2皇子か

藤ノ木開棺15年 元担当者が推論

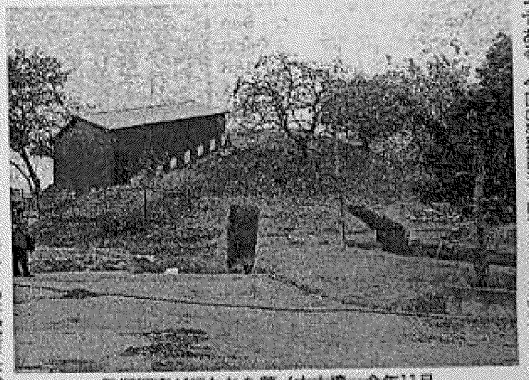
約15年の歳月、奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳で史跡整備に伴う墳丘周辺の発掘調査が県立橿原考古学研究所と同教育委員会により実施された。

今回の調査で直径約40メートル以上の大型円墳であることが確定できた。先の調査でも円墳の可能性が強いとされていたが、当時は古墳の南と南東部に民家などが隣接していたため発掘できず、わずかながら前方後円墳の可能性を残していたのだ。

新たな調査結果を踏まえて、藤ノ木古墳の歴史的位置づけを行いたい。まず墳形から見ていこう。大王墓（天皇陵）や有力豪族の墓形式として、古墳時代前期以降各地に築かれた前方後円墳は6世紀末から7世紀初頭にかけて、全国ほぼ同時に築造を終え、代わって大型方墳・円墳が登場する。藤ノ木古墳は、この変換期に築かれた墳墓である。

墳丘は2段築成で、葺石と埴輪列をめぐらす。墳丘裾の一辺は約50メートル、高さは約9メートルを測る。墳丘の形は、後円部の直径が前方部の幅とほぼ同じ長さの「帆立貝形」と呼ばれる。また、後円部の高さが前方部の高さとほぼ同じ「同高型」とも言える。

墳丘や墓壙を持たない日本の古墳の被葬者像は無意味である、との意見がある。今回の発掘調査



発掘調査が行われた藤ノ木古墳＝今年11月

残した多くの人の視点が見つかっているのである。開棺調査に関わった一人として、私は与えられた資料から、可能な限り被葬者像に迫るべきだと考えてきた。従来の資料に、今回の調査結果を加えて考えると以下の通りになる。

まず前方後円墳や方墳でないことから大王陵や豪族墓ではありえない。大王陵でもないのに一級の副葬品を持ち、その副葬品や墳輪配列に共通する国際性と伝統性から、当時の政権中枢部にいた大王家一族の一員であることを思わせる。不自然な4体合葬、副葬品の配置などから、被葬者は悲劇の2皇子（まえの・みちおう＝奈良芸術短大教授・考古学）



前園実知雄

ではないが、円墳としては国内最大規模であることから特別な位置づけができる。大王陵でもないのに一級の副葬品を持ち、その副葬品や墳輪配列に共通する国際性と伝統性から、当時の政権中枢部にいた大王家一族の一員であることを思わせる。不自然な4体合葬、副葬品の配置などから、被葬者は悲劇の2皇子（まえの・みちおう＝奈良芸術短大教授・考古学）

産経新聞　平成20年（2008年）9月28日　日曜日

野武士が開く古代
橿原考古学研究所70周年

④

■藤ノ木古墳■

報道合戦加熱、夜回り取材

昭和63年10月8日午前1時すぎ、藤ノ木古墳（斑鳩町）は極度の緊張感に包まれていた。昼過ぎに始まった未盗掘の石棺のふたを開封する前代未聞の作業。深夜になり、石工歴数十年の左野勝司（65）がシャッキとチェーンを操ると、1400年間閉ざされた重さ2トンの凝灰岩製のふたが見事に持ち上げられた。

「ちょっと中を見てこい」。県立橿原考古学研究所副所長だった石野博信（74）＝現・兵庫県立考古博物館長＝は、現場主任スタッフの前園実知雄（62）＝現・奈良芸術短大教授＝に声をかけた。「一番先に見せてもらえるとは…」。これは、頑張らないかん」。前園は、石野の気配りがうれしかった。

恐る恐る中をのぞくと、石棺内に塗られた鮮やかな朱色が目に飛び込んできた。ガラス玉で飾った大刀、金銅製の王冠、水に浮かんだ腐植片…。被葬者を荘厳にした副葬品が、被葬当時のままの姿で残っていた。空前の“藤ノ木フィーバー”が最高潮に達した瞬間だった。

周囲の興奮とは裏腹に、前園は冷静だった。同年6月にファイバースコープで石棺内をのぞいた際、既に浮えた黒い影がずっと気になっていた。副葬した石棺の破片と思っていたが、直接確かめると、鉄釘に立てられた金銅製のくつだった。「ふた」を閉じる際に落ちたのだ。

ある日の夜11時すぎ、前園宅のインターホンが鳴った。ドアを開けると、玄関先に発掘現場で見かけた新聞記者が立っていた。「もはや社会的事件だと思った」。

しかし、報道各社への情報は公平にというのが研究所の方針。前園は「記者を玄関に入れたら負け」と、外での雑談にとどめたが、粘る記者を前に立ち話は約1時間にも及んだ。「前園から特ダネは出ないと観念したのか、記者もいつの間にか来なくなったが」と笑う。

＊　＊

報道合戦も加熱を極めた。「よみがえった斑鳩貴族」「金色のファッション」。派手な大見出しと写真が連日新聞の一面を飾り、取材攻勢もすさまじかった。深夜、前園の自宅には記者が何人も訪ねてきた。大事件が発生すると、警察官宅を要夜に直撃する「夜回り取材」が行われるが、報道各社にとって、藤ノ木はまさに「事件」だった。

それでも、スクープ合戦は繰り広げられた。「藤ノ木の被葬者は2人」という特ダネが、ある新聞の朝刊1面を飾った。その早朝、「なぜ1社だけ情報が漏れたのか」と、他社の記者が殺気立った声で、寝ていた前園に電話をかけてきた。「僕は何も話していない」。きっぱり答えると、「夜回り取材」が行われるが、報道各社にとって、藤ノ木はまさに「事件」だった。

＊　＊

すべての遺物を取り上げ終えたのは、同年12月23日。空っぽになった石棺を見た前園は、出土した被葬者の骨の一部を大理石製の骨壺に入れて棺内に収めた。年の瀬の28日、石室前で慰霊祭を行い、担当者全員で黙禱した。

藤ノ木フィーバーに明け暮れた調査から、今年で20年。出土品は国宝に指定され、同研究所付属博物館で展示されている。

「藤ノ木の副葬品は、被葬者ゆかりの人たちが、心を込めて一つ一つ石棺に納めたに違いない」。実家が寺院で僧籍をもつ前園は、どこまでも被葬者の心に思いをはせる。「古代人の心を研究するのが考古学なんだ」。研究所で培った信念は、今も揺るがない。

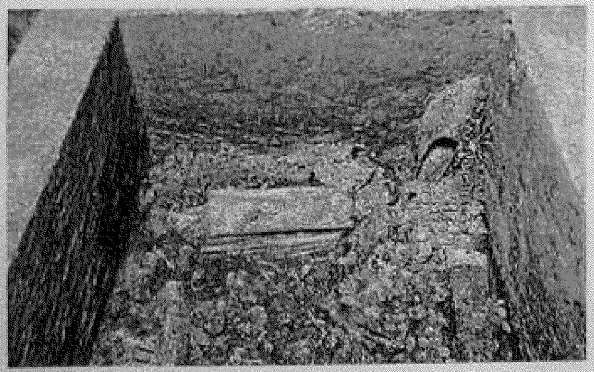
＝敬称略

（小畑三秋）





金銅製のくつなどが残っていた藤ノ木古墳の石棺（下、県立橿原考古学研究所提供）と、遺物を前に当時を振り返る前園教授（上）



藤ノ木古墳　国史跡で6世紀後半築造の直径50㍍の円墳。昭和60年の調査で、横穴式石室の奥にある石棺の外から鳳凰などの厚き彫りのある金銅製馬具が出土し、一躍注目を集めた。石棺内の金銅製冠や青銅鏡などとともに、出土遺物は国宝。2人の被葬者は成人男性と推定。今年5月、石室は車いすでも進入可能な構造に整備、一般公開された。

文化

唐招提寺金堂解体修理

受け継がれた質素の志

前園実知雄

平成十二年から十年間の計画で始まった唐招提寺金堂の解体修理は、まだ半ばを過ぎ、建築部材の調査、基壇の発掘調査も終わり、仕事は組物に進んでいるようだ。そんな中、昨年十一月二十四日に奈良文化財研究所古瓦研究室が行った、建築部材の年輪年代調査結果の発表内容は、金堂建立時期に関心を持つ多くの研究者にとっては、すばらしいプレゼントだった。三年間における調査で百十二点の年代を推定できる部材を確認し、そのうち成材年代が残り、伐採年代の確定したものが三点、いずれも七八一年という数字が示されたのだ。

実は唐招提寺金堂の建立時期については、まだ定説はない。鑑真が東大寺から移り住んだ天平宝字三年(七五九年)年から、寺が完成する延暦元年(八一〇年)までの約五十年間であることには違いないが、各分野の研究者から出されている見解は、次の三つの時期に集約することができる。

①鑑真在世中、つまり七九六年から延暦元年の七六三年の間。金堂の棟札には弟子の如宝が金堂を建立したとあること、寺が鑑真、戒壇の後、東大寺の荘和上として護持していた宝亀七年(七七六年)創建に、講堂(重要文化財)をはじめとした寺内の諸堂が見られることなどから、このころに建立した。

②五重塔を造り始めるのが延暦元年(八一〇年)であること、また如宝が唐招提寺の長老と伝った時期も考えて、平安時代に入った延暦末年から弘仁にかけての唐一なの質実である。

③今回の年輪調査で出された七八一年は、建物の上限を求める年代である。つまりこれによって①は消え、②または③のいずれかになったのだ。

□　□

私は従来から四年にわたって境内の発掘調査を担当し、今は失われている中門や回廊、さらに新田部親王の邸宅跡とみられる前身遺構の一部を発掘する機会に恵まれた。その調査成果の一つは、創建時の金堂に葺かれた瓦を特定できたことだった。金堂の軒先を飾る鴟尾大寺式の系譜を引き、四天王寺や西隆寺でも同じ型式が作られたものがすこし見られるが、最も優秀なものは平安時代の初期に、ごの長の招請が奈良国分寺に運ばれて、使われていることだった。

この瓦が作られたのは、一般的には宝亀年間(七七〇年代)との見方が有力だったが、軒瓦に伴う大量の平瓦や丸瓦の技法にも疑問を感じていた私は、さらに時期をさげるべきではないかと考えた。そして金堂のある堂を持つ一般的な寺院へと変わっていった。その転換期に金堂の建立が始まったとみられる。その時期は七八一年以後。

私が注目しているのは、金堂の須弥壇上の仏像を安置することを前提としてつくられていることである。東側の通用口から入られた場合、北面(裏側)から拝むことになり、安置されていた仏像を見ると、鑑真和上が唐招提寺に持ってきた、三体の仏像も見える。また、三体の仏像は東大寺、千手観音は筑紫観世音寺、薬師如来は下野薬師寺の本尊であった。つまり日本の三戒壇の本尊を一堂に集めたのが唐招提寺の金堂というわけだ。

さらに東大寺での戒和上の役目を終え、唐招提寺に戻った如宝は七九七年に律師となり、八〇四年には彼の努力によって唐招提寺が官符を得ることが許された。

出土瓦に加えて、金堂の須弥壇の発掘成果、年輪調査で判明したことと、残された文献と時代背景、さらに鑑真の弟子たちの思いなどを考慮した上で、私は金堂の建立時期についての次の見解を持っている。

□　□

鑑真の同行した戒律、仏法の道場として建てられた唐招提寺には、彼の在世中には金堂は存在しなかった。鑑真遷化の後は残された弟子たちの手で講堂はけられていたが、やがて本尊を安置する金堂、繁栄の象徴である唐時代の建築にしたいとした歴史的価値が下がるのではないか、と思う人がいるかもしれないが、そうした考えは持たないでほしい。なぜなら、鑑真和上を思う気持ち、彼には似合わない立派過ぎる金堂を建てたと思っていた如宝の心の中にも、やはり鑑真を慕い生の師の志は、しっかりと生きていたことを確認できた喜びがしたからである。

(まえぞの・みちお＝奈良県立橿原考古学研究所指導研究員・奈良産業大学教授)

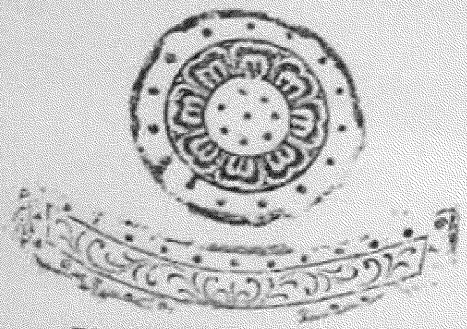


図2　金堂創建軒瓦（軒丸瓦6282、軒平瓦6722A）

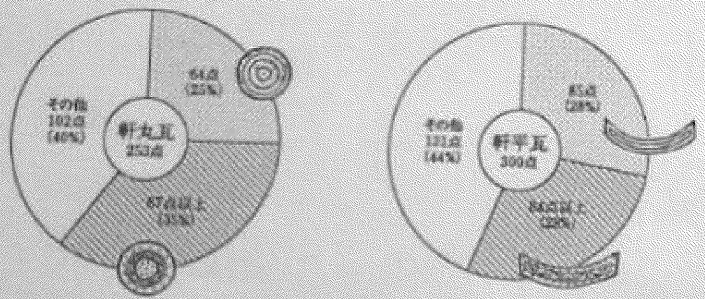


図3　唐招提寺境内出土軒瓦比率図



図4　招身連珠軒瓦（軒丸瓦6012A、軒平瓦6072A）

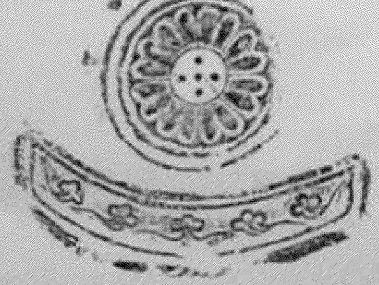


図5　蓮華宮・平安宮軒瓦
（軒丸瓦6229A、軒平瓦6032A）

文化

消えた絹の道1万キロ踏査

◇もう一つのシルクロード青海路の遺跡を確認◇

前園実知雄

古代に東西交流の道となったシルクロードは一本の道ではない。三世紀から八世紀、北方民族の勢力が強かった後漢後期から唐代にかけては、中国西部で南側のルートが栄えた。メーンの河西路の南を走る青海路である。奈良のシルクロード学研究センターが現地で初の日中合同調査を行い、その遺跡をこのほど確認した。私は調査に三年続けて参加し、多くの遺跡から交流の歴史を実感した。

青海路が通っていた青海省は、チベットと甘粛省に挟まれた三千㍍級の高原が続く。面積は日本全体の二倍もあるが、人口は五百万人ほど。遺跡の多い中国のなかでは目立たず、考古学では海外の調査団が入ったことのない〝未開〟のエリアだが、仏教伝来の流れに関心をもつ私は、以前から強い関心があった。

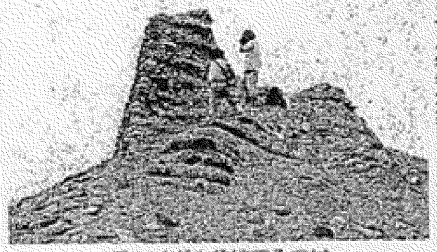
日中で混成チーム結成

一九九八年、仏教大学の杉本憲司教授らを中心とする学者が集まり、シルクロード学研究センターの研究事業に応募し、九九年度から三年間の調査費の助成が認められた。青海路沿道の遺跡の分布調査が主な目的で、日本側からは数人の考古学者や自然地理学者らが参加。中国からは青海省の文物考古研究所の許新国所長らが加わり約十人の混成チームを組成。夏に現地調査を行うことになった。

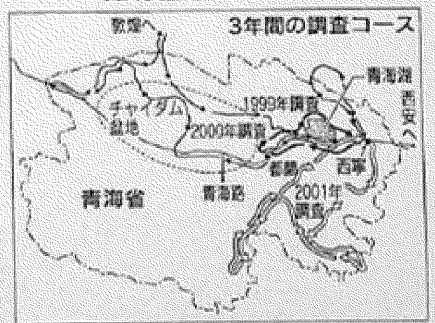
そもそも青海路は四世紀から七世紀後半にかけてこの地を治めた吐谷渾という王国が東西の通行を保証したことから栄えた。北方民族、鮮卑の一派が居着き、漢民族とも友好関係を結んで通行税を収入源にした。砂漠が広がるチャイダム盆地を囲むように山沿いに道や町が開けたようだ。

数百枚の地図を用意

車でまわるとはいえ、一面が草原や砂漠で、迷ってしまうと命取りだ。地図が粗いだけに、遺跡は



チャイダム盆地でみつけた烽火台跡らしき遺跡





戦っていない。変わらないために調査準備に全力を注いだ。

米航空宇宙局（NASA）が人工衛星で撮った市販の写真を購入。ルーペを使いながら米粒の大きさもない小さな形跡を探し、旧ソ連製で市販されている十万分の一の地図と照合していった。粗い地図のようだが、一面視界を遮るものはなく、十分役立つ。広大なエリアをカバーするには、地図は全部で数百枚に上った。

また現地の風景からおおよその位置が把握できるよう、東海大学情報技術センターに依頼して、衛星写真に植生別の色付けをしてもらった。

調査時期は七月中旬から八月上旬にかけて毎年三週間ほど。一年目は省都の西寧や青海湖周辺の主だった遺跡を回った。二年目は青海省を東西に横断、青海路の全体を見た。三年目は四川省の成都に通じるルートだ。

合計五十九日間で二万二千キロを走破する、すさまじい旅だったが、持参した全地球測位システム（GPS）を使って遺跡七十四件の八十五地点の経緯度を確認、地図に書き込めた。

青海路のルートをおおよそ特定できたのは大きな成果だが、仏教遺跡を研究する私にとって、一般人はなかなか行けない多くの遺跡を見られたこと自体が大きな収穫だ。

青海省には唐代以前の石窟寺院は数少なかったが、二年目に青海路を西に走っていくと、チャイダム盆地の東部にある烏蘭（ウラン）付近の希里溝（シリゴウ）瞭望台（りょうぼうだい）にたどり着いた。

一見、かつての烽火（のろし）台だったようだが、土で塗り固められた壁の下にレンガ状の磚（せん）が積み上げられていた。もとは仏塔だった可能性が強い。おそらく漢教徒らが何らかの事情で塗り固めたのだろう。さらに西に行って見つけた、崩れかかった烽火台状の塔もチベット仏教の様式のようだった。将来、発掘調査が可能であれば、是非とも実施したい遺跡だ。

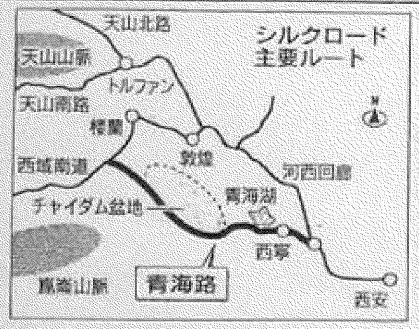
文成の流れを実感

三年目に調査したのは唐と吐蕃（とばん）の往来の道、入吐蕃道だ。吐蕃は七世紀前半に唐の太宗に朝貢し、皇帝一族から王の嫁をもらいたいと願い出た。この後、文成公主、金城公主という二人の娘が相次いで皇帝一族から吐蕃に嫁いだ道を探したのだ。

ルートの一つに想定している玉樹（ぎょくじゅ）蔵族自治州で見ることのできた文成公主廟と付近の道沿いの岩に刻まれた文成公主の礼拝図は年代的にも唐代のものと見られ、シルクロードとつながるチベットの文化の流れが見て取れた。書物で読んだ内容が実感できた。

風呂にほとんど入れず、食事も脂っこくて、車に揺られっぱなしの調査の旅は楽なものではないが、七月中旬にはまた青海省を訪ねる。今後チャンスがあれば、本格的な調査をしてみたい。（まえぞの・みちお＝奈良芸術短期大学教授）

「南のシルクロード」確認



水脈沿いに遺跡連なる　◀GPS使い日中合同調査

もう一つのシルクロードを確認――。大陸の東西を結んだシルクロードのうち南方を走る「青海路」のルートが日中合同の遺跡探査調査でこのほど特定された。奈良市のシルクロード学研究センター（樋口隆康所長）が現地研究者と三年かけて踏査したもので、近く報告をまとめる。

中国のシルクロードは「河西回廊」が有名だが、北方民族が台頭した三世紀から八世紀にかけては「青海路」に交通が移った。

調査は同研究センターと青海省文物考古研究所が一九九九年夏から三回実施した。合計約一万二千㌔を踏査、衛星を使った全地球測位システム（GPS）で、七十件を超える遺跡の緯度、経度、高度を確認。その結果、南のシルクロードのルートが特定された。

「青海路」は青海湖南岸を西へ進み、チャイダム盆地の南縁部を通って新疆ウイグル自治区に抜ける。現在の道路からはるか離れた瀾水（ゆうすい）エリアに遺跡が集中し、ルートは水脈に沿って通ることがわかったという。

加藤九祚・国立民族学博物館名誉教授は「中国でのGPS調査は画期的。青海省は遊牧民族と漢民族の交流の重要地点だが、光があたらなかった。今後の調査に期待したい」としている。

県の公共事業の事前調査として埋蔵文化財の発掘調査に取り組む県埋蔵文化財センター(松山市)の理事長に、1日付で就任した。1977年の設立以来、県教育長が歴任してきたが、新公益法人改革で国から公益財団法人に移行するのに合わせての措置。埋蔵文化財行政の現状と公益財団法人移行後の目標は。

(聞き手・柳生秀人)

民間の学識経験者として初めての理事長だが。

センターの事業は県との結び付きが強いため、これまで県教育長が理事長を務めてきた。しかし、ほかの都道府県では、同様の組織の代表は学識経験者が務めているケースがほとんどだ。

私は約40年にわたり、奈良県立橿原考古学研究所や、奈良芸術短大などで考古学研究に携わってきた。歴代の理事長と比べ、埋蔵文化財に関する専門知識は持っているはず。それを生かしてかじ取りに励みたい。

県内の埋蔵文化財行政に対する認識は。

研究活動は不況で行ってきたが、出資は愛媛。常に地元の情勢は気にしなければ埋蔵物の研究はできない」という人もいるが、そんなことはない。愛媛にも素材はある。発掘物にどんな歴史的意味があるか、常に問題意識を持ち、研究を深めなければならない。

公益法人への移行も伴う。埋蔵物は、古文書には載っていない地域の歴史を解明してくれる。そして、埋蔵物はどんな地域にも残っていて、どこで見つかった物も等しく歴史的な価値がある。古事記や日本書紀に愛媛の登場回数が少ないからといって、「地方だから」とうが、埋蔵文化財の公益性をどう考えるか。

好きな言葉を紹介したい。「考古学は地域に勇気を与える」。これは恩師の言葉で、地下から見つかった埋蔵物が地域の歴史を明らかにすると。

例えば松山市にも、日本の成り立ちを解き明かす鍵になる遺跡がある。久米官衙(かんが)遺跡群は日本で唯一、7世紀前半から役所の変遷を追うことができる遺跡だ。そういった歴史の文化財も価値を自分たちが積極的に発信すれば、地域を元気づけることができるはず。

具体的にはどのような改革に取り組むか。

発掘・研究成果をもっと外部に知らせたい。埋蔵文化財は一般の人にあまり認知されていない。他県よりセンター独自の施設が少ないことなどが原因と思うが、新しい事業を打ち出したい。

例えば松山市に協力してもらい、市の考古館などで発掘物の展示会を開きたい。埋蔵文化財センターは県の組織なので、県内の全市町に協力を呼び掛けることができる。県内全域で同様の活動を定期的に行いたい。また、知人の専門家を招いた公開講演会も開催していくつもり。

私はこれまでの活動で多くの知識や人脈を培ってきた。それを愛媛の埋蔵文化財研究にささげ、積極的な情報発信に取り組みたい。

キーパーソン Key Person

民間の学識経験者として初めて県埋蔵文化財センター理事長に就任した

前園 実知雄さん(65)



まえぞの・みちお 東温市出身。同志社大卒。1972年奈良県立橿原考古学研究所。98年奈良芸術短大教授。同県の藤ノ木古墳、唐招提寺、法隆寺などを調査。東温市の法蓮寺住職も務める。

地域社会との接点 >5

考古学協会総会大会を前に

地域史 列島の歴史示すかぎ

考古学は、過去に生きた人々の意思とはかかわりない資料も含め、そこに暮らした彼らの生活の跡がありのままに再現できるところに魅力がある。そこが、限られた史料をもとに歴史を復元する文献史学との違いである。古代において常に政治、文化の中心地であり続け、多量の文献が残り、伝承が語り継がれている近畿地方とは異なり、他の多くの地域では、歴史解明に考古学の果たす役割は大きい。

近年、中央志向の歴史からは見えてこなかった、列島各地のさまざまな地方色ある豊かな歴史が明らかになってきた。考古学の成果によると、弥生時代以来、九州と近畿の二大文化圏の間に、いわば文化の通過地域として認識されることが多かった西部瀬戸内地域だが、環濠大や各国出体などの積力的な調査と研究で、その様相は大きく変わった。文京遺跡、樽味四反地遺跡、永納山遺跡などは、それぞれの時代の列島の歴史を左右する重要な存在であり、また、地域に住む人たちに自信と誇りと活力をもたらすことになるだろう。

(前園実知雄・奈良芸術短大教授)



久米官衙跡の建物群を囲む二重の柵列(1987年、松山市埋蔵文化財センター提供)

群(七九年に国史跡に指定)。七世紀の古代国家成立期を考える上で、現在のところ他の地域で類を見ない重要な遺跡群である。「日本書紀」の記述の解釈に加え、地道な発掘調査で明らかになった建物群や道路遺構、「久米評」に搬入された土器、重複して建てられた古代寺院などの解明は、地域を超えた歴史と直接つながってくる。

過去に明らかにされている記録に残された歴史の批判も含め、地域の考古学の充実は、この国の本当の歴史を知る上で最も重要であり、また、地

一遍会報

発行
松山市道後湯月町
宝厳寺内
一遍会
089－923－0647

第337号
平成22年7月1日

四月例会（第四五七回） 平成二十二年四月十日（土）
道後公民館　出席三十四名
講話　久米官衙遺跡群と道後温泉
奈良芸術短大教授　前園実知雄氏
卓話「一遍聖絵」を読む⑨
一遍会理事　杉野　祥一氏

五月例会（第四五八回） 平成二十二年五月八日（土）
道後公民館　出席二十七名
講話　一遍上人の顕念仏～南無阿弥陀仏が
南無阿弥陀仏を踊っている～
愛媛大学　教授　圓増　治之氏
行事　平成二十二年度一遍会総会

久米官衙遺跡群と道後温泉

前園実知雄

松山市東南部にある来住台地の西端部、東西約五百メートル、南北約四百メートルの範囲には、来住廃寺をはじめ七、八世紀の建物群が計画的に配置されていることが、松山市教育委員会、松山市埋蔵文化財調査センターなどの精力的な調査で次々に明らかになってきた。そしてこの一連の遺構群全体は久米官衙遺跡群と名付けられ、国史跡に指定された。

この遺跡群の重要性についてはいくつか挙げることが出来る。一つは七世紀初頭から八世紀にかけての時代、つまりわが国が律令国家として生まれ変わろうとしている初期の時代から、大宝律令（七〇一年制定）に基づいた新しい国家が確立した時代までの、官衙（役所）とみられる建物の遺構が間断なく存在していることである。全国どこを見ても今のところこのような遺跡は見つかっていない。久米官衙遺跡群はその変遷過程をたどることの出来る、きわめて貴重な遺跡なのである。この遺跡を分析することによって、当時の地方政治の姿が復元できる可能性を秘めているのだ。

もう一つは、その遺構群の中に七世紀中頃に建てられた、二重の柵列に囲まれたいわゆる「回廊状遺構」と呼ばれている一辺百メートル余りの空間があり、東西に長い建物も一部明らかになっていることである。そしてこの施設は建て替えられた痕跡はなく、さほど長期にわたって機能していたとは考えられないようなのである。私はこの遺構と『日本書紀』の舒明、斉明紀に見える「伊豫温湯宮」、「石湯行宮」との間に関連性があるのでは、と考えている。舒明紀によると、十一年（六三九年）十二月から翌十二年四月までの長期にわたって舒明天皇と大后は「伊豫温湯宮」に滞在しているが、ちょうど同時期に都では、わが国で最初の官の大寺である百済大寺の塔が建立されている。近年の調査で明らかになった吉備池廃寺（桜井市）を百済大寺にあてる説が有力になっているが、その吉備池廃寺の軒丸瓦の系譜上にある瓦が、「回廊状遺構」とその周辺で出土しているのである。これをどのように捉えるか、いろんな解釈が可能ではあろうが、私は両者の間の関連性を考えたいと思っている。

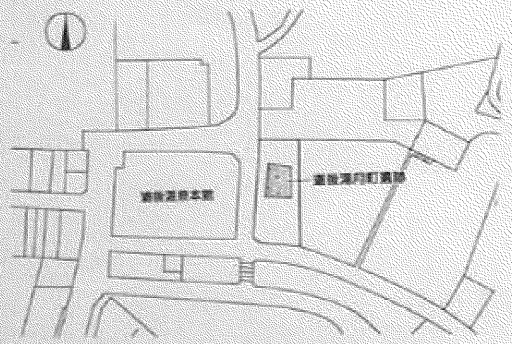
舒明天皇の大后は後に斉明天皇となるが、彼女は百済への援軍派遣のため筑紫に向かった七年（六六一年）正月十四日に伊豫の熟田津の「石湯行宮」に泊まっている。そこで同行していた額田王が詠んだ歌「熟田津に舟乗りせむと月待てば　潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」（『万葉集』巻一の八）はあまりにも有名であるが、いまだ熟田津の地についての定説はない。しかし『万葉集』の註をみても、その宮は夫であった舒明とともに過ごした宮であることは明らかで、「伊豫温湯宮」＝「石湯行宮」という図式が成り立つ。掘立柱建物の耐用年数から見れば、微妙なところだが、同じ建物でないとしても、近接したところにあったと見てよかろう。

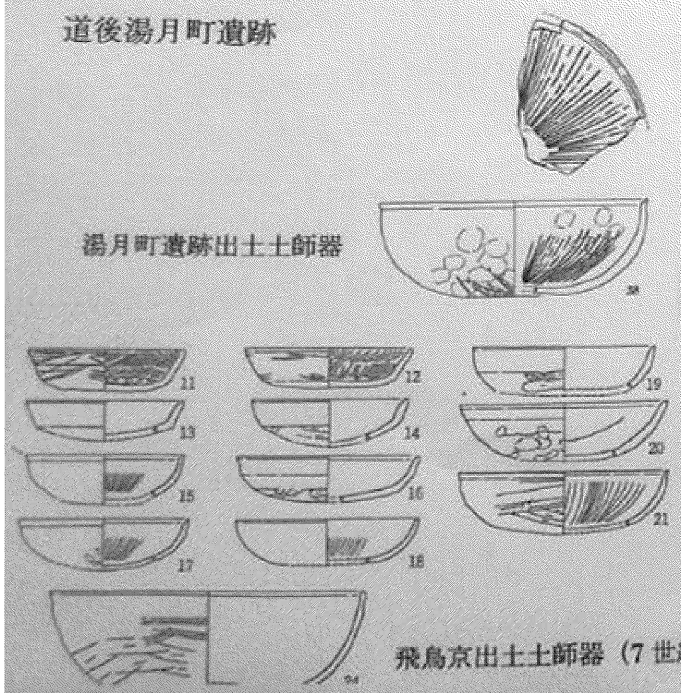
伊豫温湯が道後温泉であるかどうかについて異論はあるが、私は平成十七年に松山市埋蔵文化財センターが行なった、道後湯月町遺跡の発掘調査の成果から、ほぼ間違いないと見ている。この遺跡は道後温泉本館のすぐ東側にあり、古代から近世にわたる池が検出され、層位から四期に分けることが出来る。池のさらに下層からは弥生時代や古墳時代の土器も出土していることも興味深いが、私が最も注目したのは最初の池の中から見つかった土師器の鍋だった。その土器は私たちがパレス土器と呼んでいるもので、鍋の内外をヘラで丁寧に磨き、独特の暗文を施した土器で、飛鳥地域で七世紀の中葉前後に作られたものだったからである。この土器は飛鳥時代にあまり多くはないが、関東地方までも運ばれており、久米官衙遺跡群でも確認されているものである。つまり都から手で運ばれてきた土器なのである。さらに池の土壌分析ではイオウ成分も検出されている。この池状遺構は温泉池そのものだった可能性も出てきたのだ。

飛鳥の都の土器を出土した池は、現在の温泉本館に隣接しているが、江戸時代の道後温泉絵図にも描かれている。

久米官衙群のある来住台地から道後温泉までは直線距離で約五キロである。古代人の感覚からすればさほど遠い距離ではないだろう。私は温湯宮、行宮と実際の温泉が同じところでなくてもいいのでは、と思っている。七世紀の初頭から重要な施設のあった来住台地の一角に行宮を造営し、そこから温泉地に設けられた施設に行幸したのであろう。

『日本書紀』には四ケ所の温泉が記され、合計十回登場するが、そのうちの三回が道後温泉である。また私たちが普通名詞として使っている「温泉」という名を持つ郡名が初めて見えるのが、天平一九年（七四七年）の『法隆寺伽藍縁起流記資財帳』（法隆寺の財産目録）に記された「温泉郡」である。『古事記』や『日本書紀』といった古典には「温泉」の文字は見えず、「湯」、「湯泉」、「温湯」と示し、いずれも「ゆ」と読ませている。「温泉」は中国からもたらされた外来語なのである。普通名詞であるこの外来語を固有名詞として初めて用いたのが、わが温泉郡（今はなくなったが）ということになる。つまり、奈良時代において「温泉」とは道後温泉をさしていたといっても過言ではなかろう。その想いのほどを私たちは心にとどめて、道後温泉に誇りを持ち、内外にアピールし、また後世に伝えてゆくべきだろう。





キトラ古墳は誰の墓か

前園 実知雄

七〇〇年前後に没した皇子、豪族



奈良県明日香村の キトラ古墳の調査が佳境に入り、高松塚古墳と同じ極彩色の壁画で飾られた石槨内に眠る被葬者探しの議論が活発になってきた。七世紀末から八世紀初頭に造られた終末期古墳との見方に異論はないが、考古学の立場からすれば、藤原京周辺の終末期古墳群をあらゆる角度から比較検討し、その共通点や相違点を整理した上で被葬者像に迫るべきだろう。

□ □ □

この一帯に分布する古墳の中で、八角形墳およびその可能性が強いものに、野口王墓古墳、牽牛子塚古墳、束明神古墳の四基がある。それぞれ独自の埋葬施設を持ち、丘陵上に位置する特色ある地で、規制の枠を超えた古墳と見てよい。即位した天皇およびそれに準ずる人物が被葬者の候補としてあげられる。具体的には、野口王墓古墳が文武、持統陵、中尾山古墳が文武陵、牽牛子塚古墳が斉明陵、束明神古墳が草壁皇子の墓ということになる。

それに対して、高松塚古墳、マルコ山古墳、キトラ古墳はどれもさほど規模の大きくない円墳で、埋葬施設は横口式石槨、棺は漆塗木棺、わずかに棺を飾る金具の中にともに金属製の大刀装具が見られるという共通点を持つ。

このように三基の古墳の間には類似点が多く、換言すれば一定の規制の下に築かれた古墳で、政治的、社会的地位の近しい人物を被葬者として想定できよう。たとえその中で、マルコ山古墳を除く二基は、他に例を見ない壁画を持つという特徴を持っている。私は二基の横口式石槨は、天井部の構造の変化からマルコ山古墳→キトラ古墳→高松塚古墳への変遷を想定している。壁画の有無は時期差を表していると考えたい。

それではキトラ古墳はどうであろうか。調査中に発表された限られた情報でしか考えられないが、先の二基との比較の上で、おおよその見通しはできよう。

まず石槨の形態は終末的の見方も、両古墳の間に置くことができる。壁画は高松塚古墳にはない朱雀が南壁にあり、他の四神の描写も躍動感にあふれ力強さを感じる。人物群像はないが、動物両人身の十二支像が四面の壁画下方に描かれている。天井の星座は赤道、黄道を表現した情報なので、高松塚古墳とは大きく異なる。

壁画のルーツをどこに求めるかは、今後研究されるだろうが、これら諸要素と時代背景を考慮すれば、以下のような見通しがたってくる。

百済文化の影響のもとに生まれた横口式石槨に、先に描いたのはキトラ古墳だった。天武朝以降、唐との関係を絶たざるを得なかった政府は、遣新羅使を介して大陸文化を導入したが、同時に滅亡した百済の人々、さらに高句麗移民をも積極的に受け入れた。そういった時代背景の中で朝鮮半島の諸要素がキトラ古墳の壁画を生み出したのだろう。

大宝四年（七〇四年）埋葬した遣唐使の果たした功績ははかり知れない。高松塚古墳に描かれた人物像を加えた構図もまた、海獣葡萄鏡とともに新たに唐から導入した文化要素だった。

□ □ □

この観点に立てば、キトラ古墳の築造はきわめて限られた期間、つまり藤原京に遷都もってもマルコ山古墳（六九一年）から高松塚古墳（七〇五年）までの十五年間となる。残された記録では、六九八年に没した田中朝臣足麻呂から七〇二年の粟田朝臣真人までの五年間にいた十七人のうち僧道昭と持統上皇を除く十五人が候補となる。

さらに死亡記事はないものの、葬送に対して天皇から品物を贈ったと記され、亡くなった二人を加えると実に二十六人になる。しかし、マルコ山古墳、高松塚古墳の被葬者候補を考慮すると、さらに限定できる。皇族の男子に限れば六九七年没の弓削皇子、上位の豪族を入れれば七〇一年一月の入唐使節、七月の多治比真人嶋、七〇三年の阿部朝臣摩呂人、さらに養老七年の王子たちで来日し、六九二年にやなった百済王善光などがあげられる。

マルコ山古墳、高松塚古墳との比較の上で最も可能性が高いと考えられる天武の皇子の弓削皇子は、人骨の年齢を重要視すれば、生年（六七二年）から換算して二十六歳でしかなったとみられ、候補からははずすべきかもしれない。そうであれば没年が五十歳を超えていること が明らかな百済王善光、阿部朝臣摩呂人などが有力な被葬者といえようか。

さらに詳細は調査の結果をもとに考えてゆきたい。

（まえぞの・みちお＝奈良芸術短期大学教授、橿原考古学研究所指導研究員）

産經新聞

2004年8月7日

文化

牽牛子塚古墳 被葬者は斉明天皇 決定的

100年論議に終止符


発掘された牽牛子塚古墳。墳丘の裾は石敷きで八角形に取り囲まれていた＝2010年8月、奈良県明日香村

奈良県明日香村教育委員会が3月発行した「牽牛子塚（けんごしづか）古墳発掘調査報告書」が、論争の的だった被葬者の「斉明天皇説」を決定的にするものとして注目されている。報告書の意義を、県埋蔵文化財センター理事長で考古学者の前園実知雄さん＝東温市＝に寄稿してもらった。

考古学者 前園実知雄さん（東温）寄稿

日本書紀の記述と合致

一つの巨石をくりぬき、二つの埋葬施設を造り出した特異な横口式石槨（せっかく）を、二つの巨石を刳（く）り抜いた横口式石槨（せっかく）を、明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。

一つの巨石をくりぬき、二つの埋葬施設を造り出した特異な横口式石槨（せっかく）を、二つの巨石を刳（く）り抜いた横口式石槨（せっかく）を、明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。

一つの巨石をくりぬき、二つの埋葬施設を造り出した特異な横口式石槨（せっかく）を、二つの巨石を刳（く）り抜いた横口式石槨（せっかく）を、明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。

一つの巨石をくりぬき、二つの埋葬施設を造り出した特異な横口式石槨（せっかく）を、二つの巨石を刳（く）り抜いた横口式石槨（せっかく）を、明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。明日香村教育委員会が2009年から行った発掘調査の成果を、報告書は、江戸時代から論者に注目されてきた。



まえぞの・みちお 46年、東温市生まれ。奈良県立橿原考古学研究所研究員を経て、現在、奈良芸術短期大学教授。著書に「斑鳩に眠る二人の貴公子・舎人と木簡」「奈良・大和の古代遺跡を掘る」など。

出現された報告書は一つの横口式石槨墳（岡古墳と、近くで新発見した越塚御門古墳）が見つかったからだ。

日本書紀には先の記事の他に、山陵の造営の経過に二つの日、（斉明天皇の孫の）大田皇女を陵の前に葬る」とある。石槨の形式や、木棺が漆塗りでなる大規模。

発掘から半年、さまざまな論議があったが、牽牛子塚古墳の状況（棺）の方が上位とみられ、越塚御門古墳が「日本書紀」天智天皇6年（667年）2月の「斉明天皇と娘と葬る」と矛盾はない。

わずか20日後に飛鳥（奈良県）から近江（滋賀県）へ遷都しているのかシミュレーションしてみよう。「斉明天皇は661年7月に朝倉宮（福岡県）で崩御。

一方、「静日本紀」の文武天皇3年（699年）10月に越塚（おちが最も知りたい情報だった。この情報公開山陵を被葬とあるが経未期古墳を調べる天皇陵、天智天皇の弟天武・持統天皇陵について宮内庁の担当者による調査報告が記載されている重要に扱れておきたい。既に報道された通り、天武・持統天皇陵のアクセス道は切公表で、私たちが知りたい情報

墳丘の裾は石敷きで八角形に取り囲まれていた。

（まえぞの・みちお＝奈良芸術短期大学教授、橿原考古学研究所指導研究員）

愛媛新聞

2013年11月9日